

こどもの森の利用案内

- ★ こどもの森は、時間中いつ来ていつ帰ってもOK。お金はかかりません。
- ★ こどもの森にある道具は自由に使えます。使い終わったら片づけてね。
- ★ おやつやお弁当を食べることもできます。ごみは持って帰ってね。
- ★ 汚れてもいい服や靴で来てね。着替えもあるといいよ。
- ★ なくなったら困る大事なものは、おうちに置いてくるか身に着けて遊んでね。



大人のみなさんへ

あそび コラム 繰り返す「無駄」から 子どもはたくさん学んでいる

暑くなってきて、今年もそろそろウォータースライダーの時期。去年を思い出してみると、子ども達は一日中、ひたすらウォータースライダーをやり続けていました。次の日もまた次の日も。なぜ同じことを繰り返して飽きないんだろう?と、大人は思ってしまいますよね。

何百回でも一回ごとがまったく違う体験

子どもたちのウォータースライダーを見ていると、最初はゆっくりだったのが少しづつ速く滑るようになり、頭を下にしたり助走したりとアレンジを加え、最後には自分なりの技を生み出していく。ときどきスピードが出すぎて怖んだりお尻を打ったりしながらも、滑る感触、水に入った時の衝撃、しぶきの上がり方、身体の使い方など、次から次へと「さっきよりもっと気持ちいい一回」を求め試行錯誤しています。だからたとえ何百回滑っても、その子にとって一回ごとがまったく違う体験なのです。

子ども時代の実体験があるからこそ……

大人からすると、子どもたちの行動は、飽きもせず延々と何かをし続けたり、同じ失敗を繰り返したり、「そんなことしたら絶対痛い目にあうってわかんないのかな?」と首をかしげたくなることをやらかしたり……とにかく「無駄」なことの連続に見えます。

しかし、米カーネギーメロン大学のシーグラー教授によると、同じ行動を繰り返しながら、より確実で効率的なやり方を獲得することは、実は子どもに限らずすべての人が意識せずにしていることなのだろう。ただし大人は、過去の経験などから類推して、子どもより早く「こんな感じ」をつかむことができます。つまり、私たちが何気なくしている選択や行動も、子ども時代からの膨大な実体験や失敗があってこそなのです。

子どもたちが一見無駄なことを繰り返しているように見えても、それは理にかなったやり方にたどり着くためのデータ集めの段階、学びのひとつのスタイルなんだ。夢中になって遊んでいるその時間、数多くの経験が彼らの中に積みあがっている。そう思うと、度重なる同じ失敗も、おおらかに見守りそうな気がしてきませんか(笑)?

あそび エピソード 小さな命と向き合う

こどもの森の小さな花にとまり、蜜を集めのに余念がないミツバチ。小2男子が驚かせないようにそーっと捕まえ、虫かごに入れた。ちょっと危ない虫を捕まえるのが面白かったようだが、見ているうちにかわいくなってきたらしく、「飼うこととした」と言う。

タンポポやカラスノエンドウ、ハルジオンなど色んな花を入れていく。

「どの花が好きかいいろいろ試したら、この子はぺんぺん草の花が好きみたいだ」

他の花を全部取り出し、ぺんぺん草の花だけを虫かごに敷き詰めていく。

「この間テレビでハチは暑すぎると死んじゃうって言ってたから、涼しい所に置いとく」

ちょっと遊んでは日陰に置いた虫かごの様子を見に行き、「ジョン(ハチにつけた名前)を見に、また明日の朝来る!」と帰っていった。

翌日の朝、ハチは生きていて、いそいそと新鮮なぺんぺん草を入れてやる少年。しかし、その日の昼頃、ハチは死んでしまった。

「日陰だったのに、鬼ごっこしている間に太陽の向きが変わって日が当たってた…」とやるせない表情。

しばらくして、ハチのお墓を作ったから、お参りしてほしいと言う。

「人が通らないところに作ったんだ」

お墓には“ジョンのはか”と書いた木の墓標があり、周囲にはぺんぺん草が敷かれていた。

自分次第で生きもし、死にもする小さな命に子どもたちが惹かれるのは自然なことで、全力で守ることもあれば、時に殺してしまうこともある。無用に殺生するのが良いとは思わないけれど、自然の中にある様々な命とどう向き合うどんな気持ちになるのか、小さな生き物からひとつひとつ学んでいるのかもしれない。そう思った出来事だった。

こどもの森は、身近な自然のなか、子どもたちの発想で自由に遊べる緑地です。何をして、どうやって遊ぶか?を、子ども自身が決められるよう、なるべく手や口を出さずに見守ってあげてくださいね。心配なこと、わからないことは、プレーリーダーにどうぞ声をかけてください。